５１．柳井　雅人氏（北九州市立大学　学長）

「広義的なインフラへ投資し、「使い勝手の良いまち」を目指してほしい」

柳井　雅人（やない　まさと）
宮城県出身。
九州大学経済学研究科博士（経済学）。
北九州市立大学経済学部講師、助教授、教授経済学科長、学生部長、理事、副学長等を経て、2023 年学長に就任（現職）。

「インフラへの投資で地域課題の解決を」

市の仕事は２つあります。１つ目はインフラ整備であり、２つ目は地域課題の解決です。１点目は２点目の地域課題の解決にもつながります。必要な事業を精査して、そこに集中してインフラに投資することで、産業や社会生活のレベルがあがり、所得水準も上がります。「稼げるまち」というのはそういうことも意味します。市はインフラ整備を通して経済を活性化させ、税収を増やし、その増加分を安心、安全で「使い勝手の良い」まちづくりに活かすことが大切です。

「移動しやすい基盤整備を行う必要がある」

北九州市は産業・社会基盤が揃っているものの、例えば港湾と空港等が近接しておらずバラバラで、都市高速が山を通っているといったように、組み合わせが良くなく、立地が良くありません。立地を良く考えてインフラ整備を進めるべきと考えます。

行くまでに時間がかかると使わなくなるので、人口密集地に高速道路等を時間とお金をかけてでも通していく必要があります。人口が増えているところは小倉南区の守恒周辺や小倉北区です。折尾から学研都市は人口が増えているが陸の孤島になっています。若戸大橋経由で学研都市につなげるのか、陣原から折尾、学研都市をつなぐのかといった点を考慮し、移動しやすい基盤整備を行うことで使い勝手の良いまちをつくる必要があります。福岡市の都市高速道路網のように、直方や遠賀、行橋など近隣都市部の住民を中心部に吸い上げていく仕組みにするべきです。

福岡市の七隈線は人口密集地の市南部から博多駅まで多くの時間と資金をかけて繋げ、乗客数が増えて活況を呈しています。お金がかかっても、やると言ったら、妥協して変なところに作らず、やり切るということが大事です。

また、安全・安心で使い勝手の良いまちの基盤整備をすれば、企業の重要な機能が移転してくるでしょう。その後、ハードルは高いものの、政府機関などの移転も考えられます。市の「バックアップ首都構想」については、本社の補完機能を北九州市に置くような動きはあり得ると思って見ています。

「クリエイティブ層を惹きつける」

クリエイティブな人に住んでもらおうと考えた際、クリエイティブな人にも「スーパークリエイティブコア」、「クリエイティブプロフェッショナルズ」と「ボヘミアン」といった「グルーピング」があることに留意が必要です。「ク

リエイティブプロフェッショナルズ」の金融系人材や大企業の上層部といった人たちは企業がないと来ませんが、「スーパークリエイティブコア」層は一人でも来ます。そういった人たちが住環境に求めること（教育、文化、仕事や生活のしやすさなど）を考えて整備することが必要です。「ボヘミアン」層に対しては、何がヒットするか分からないため難しいです。「どこが好き」、ということではなく感覚で動いている側面があります。やはり「クリエイティブプロフェッショナルズ」「スーパークリエイティブコア」層を惹きつけることに注力し、残りは当たったらラッキーぐらいに考えておけば良いと思います。

「教育もインフラと捉え投資する」

教育は重要で、単なる知識ではなく、思考力・哲学を持った子どもへの教育が求められます。もう少し目線の高い、海外に出ていくような人を育てるシステムを有したような進学校レベルの一貫校といった教育機関があると良いでしょう。

教育もインフラと呼べ、インフラの話とつながっています。民間の活力を導入しながら効率的・効果的に教育をやる環境を作ることがテーマで、あとはそれに付随して枝が伸びるイメージです。

子育ては北九州市に強みがあるので、教育も含めて整備すれば、子供の親世代も丸ごと転入して人口増につながり、福岡市などの所得を移転してくることにつながる。市は、やはり教育インフラの整備をベースにして、そこからの展開を描くことを検討するべきと考えます。

「情報産業、医療介護福祉のレベルアップを」

生活していくにあたっては、医療環境も充実しており使い勝手の良いまちだと感じていますが、福祉と介護については市内の介護福祉産業を充実させた方が良いと考えます。10～15年後には東京も超高齢化するので、看護師も福祉事業者も東京に吸われてしまいます。従事者の所得支援や働きやすい環境基盤を作って、東京との賃金格差を生まないようにすることが必要です。

また、今後、地方の人口減少が加速度的になり、情報人材も奪い合いになります。大学も新学部を山口で４か所、福岡周辺で３か所、それぞれに 100 人ずつぐらいの規模で作るので、高校生が外に出ていくことになります。危機感を持った方が良いと思います。GX・DX・AI は基礎学力が必要で、地元大学から情報人材を継続的に供給する必要があります。

今後、需要が高まる情報産業人材、医療介護福祉人材は地域内にとどめておくことが大切で、人口の維持や快適な生活に直結します。そのような分野の労働環境のレベルを上げておくことが大切です。

「「使い勝手の良いまち」を目指す」

将来のまちの姿に枕詞をつけると、「人にとって、使い勝手の良いまち」が良いのではないでしょうか。

移動もしやすいし、買い物もしやすい、食べるものもおいしい、子育てもしやすい、そして街全体がコンパクトで日常生活がストレスなく送れることを目指す。とくに北九州市の中核である小倉都心部に、ワンストップで娯楽、食事、買い物、学習などができるゴールデンストリートを定石どおりに整備することが、人を呼び込むのに大変重要です。